

一席 沖縄県知事賞

空はとおく、とおく

玉城 紀子

あらすじ

戦後七〇年を迎え、風化していく沖縄戦、しかし、七八歳になってもいまだに終わらないそれぞれの戦争の闇に向き合う二人の女性の物語である。

主人公の幸代は肺がんを患い余命数ヶ月との宣告を受ける。幸代は八歳のときに沖縄戦を体験し、壕のなかでの生活を送った。妹以外の家族

は集団自決にて亡くなっている。そんな幸代の気がかりは、未だに壕の中で生活をしている友人（芳子）のことであった。

幸代には芳子とカネの二人の親友がいたが戦時中カネは兵士に暴行され、帰らぬ人となりその死を目撃した芳子は二度と壕からでることができなくなり、壕の中で生活を続けていた。

幸代は芳子が暮らす壕まで、週に何回か通い食べ物などを届けていたが、死ぬ前にもう一度会いたいと、芳子に壕の外に出てきてほしいと懇願する。

幸代の願いを聞き入れ、芳子は七〇年ぶりに壕の外へと出てくる。

幸代と芳子はそれぞれに自分たちが戦争で生き残った意味を自問自答し続けて七〇年以上を生きてきた。こたえが出ないままの二人であったが芳子が壕から出てきてからの生活は二人にとってそのこたえをみつけ

ていく大切な時間となり、生きることの尊さを感じはじめる。

幸代は、夫（金城浩一郎）との新たな繋がり（時間）も築き、子供のころの夢にも挑戦することになる。

登場人物

- ・金城（仲宗根） 幸代（8）（16）（30）（78）
- ・金城浩一郎（9）（17）（31）（79）
- ・大城芳子（8）（20）（78）
- ・仲宗根（吉本）千代（3）（73）
- ・吉本美奈（28）
- ・照屋カネ（8）
- ・大城靖男（13）

- ・ 吉本光（0）
- ・ 幸代の母
- ・ 幸代の祖父、祖母
- ・ 芳子の父
- ・ 看護師A
- ・ 医師
- ・ 男性A、男性B
- ・ 女性A、女性B

○とある道

海岸沿いを走るバス。

沿道にハイビスカスの花が咲いている。

○南部病院・外観

二階建ての古い病院。

正面には『沖縄県立南部病院』の文字。

○同・中庭

ベンチに腰掛けている年配の患者。

ベンチの向かいの窓からはうつむいた金城幸代（78）の姿が見える。

○同・内科診療室内

医師の前に座る幸代、肌は浅黒く、しわが刻まれた横顔。

幸代の横には金城浩一郎（79）が座っている。

医師の声「治療は難しい状況です」

金城は唇を強く閉じ、太ももの上で手を強く握り締める。

○とある道（夕）

県道を走っているバス。

○バス車内（夕）

真ん中あたりの二シートに腰かけている金城と幸代。

窓際に座る幸代は窓からの景色を穏やかな顔で見ている。

金城は幸代の様子を気にしている。

幸代は外をじっとみつめている。

幸代の視線の先には、木々が覆った岩のような（壕）ものが見える。

幸代「（小声）よっちゃん……」

夕日があたる壕の入り口付近。

○金城家・外（朝）

赤瓦屋根の大きな平屋、奥には畑が見える。

金城がパイナップルの収穫をしている。

近づいてくる幸代。

○同・畑（朝）

金城が手を止め、幸代を見る。

金城「どこか出かけるのか？」

幸代「うん、よっちゃんのところへ行ってきますね」

金城「ああ、気をつけて」

幸代「よっちゃん、きつと今度こそ出てきてくれますよね」

幸代は笑顔、金城は鎌を持ち作業を続ける。

幸代「行ってきます」

幸代は歩いていく。

金城は手を止め、幸代の後ろ姿を見つめる。

○雑木林（朝）

岩にはコケが生えている。岩と岩の間の小さな砂利道を歩いて
いる幸代の後姿、手には風呂敷包みの荷物。

○壕の入り口前（朝）

重い木の板をゆっくり動かす幸代。

少し隙間ができ、穴の入り口が見える。

幸代は少し腰をかがめて、

幸代「よっちゃん、わたしです、幸代です」

幸代は、風呂敷包みの中に入れる。

穴の奥から人が歩く音が聞こえる。

芳子の声「（小声）幸代ちゃん」

幸代「芋ふかしてきたよ、あと、三枚肉も」

芳子の声「いつも、ありがとう」

真っ暗な穴の奥。

幸代は穴の傍の岩にゆっくり腰を下ろす。

幸代「あのね、よっちゃん、もうここから出ようよ」

穴の中は静か。

幸代「よっちゃんが外へ出られない気持ち、十分わかってる」

穴の中は静か。

幸代「私、もうすぐ」

幸代は空を見上げて、

幸代「死んじゃうの」

穴の中の石が転がる音がする。

芳子の声「……どうして……」

幸代「うん、病気になるちゃった、もう78歳おばあちゃんだから、治らないみたい……」

幸代は空を見上げる。

タイトル「空はとおく、とおく」

○空（朝）

雲ひとつない青空。

T「七〇年前」

○回想・××海岸、砂浜（朝）

T「一九四五年一月」

大城芳子（8）と仲宗根幸代（8）照屋カネ（8）が川の字に

寝転んで空を見上げている。

カネ「きのうね、お姉ちゃんの十三祝いのお祝いをしたの、お祝いっていつても、お芋の煮物だけしかご馳走なかったけど」

幸代「十三歳かー女学校にも入れるんだよね、憧れるな」

カネ「でも、母ちゃんが女学校に入っても今は勉強どころじゃないって」

芳子「私は学校の先生になりたいから勉強がんばりたいんだけどな、

二人の夢は？」

幸代「私はこのまえ、お母さんに声をほめられたから女優になりたい！

ラジオから聞こえる女優さんの声、憧れてるの」

カネ「素敵！私はねお嫁さんになるんだもん」

顔を見合わせる三人は笑顔。

芳子「誰が最初に夢を叶えられるか、競争よ」

無邪気な笑顔の三人。

遠くの海面がきらきら輝いている。

○回想・とある民家（夕）

警報が鳴っている。

防空頭巾をかぶり家を出る人たち。

○回想・雑木林（夜）

T 「一九四五年三月末、沖縄本島地上戦が激化していく」

二〇人ぐらいの人が小走りに壕に向かって走っている、その中に芳子の姿。

芳子「靖男兄ちゃん待って」

大城靖男（13）が振り向き、芳子の前に手を出す、
芳子が靖男の手を掴み小走りに走る。

○回想・壕の入り口（夜）

芳子と家族が入り口にたどり着く、

芳子が後ろを向くと母親と手を引いて走ってくる幸代の姿。

芳子「幸代ちゃん！」

幸代「よっちゃん……怖いよ」

幸代は泣きべそをかいている。

幸代「怖いよ、よっちゃん」

芳子「大丈夫、大丈夫、すぐにお家に帰れるから」

芳子は幸代の手を握り締める。

二人は家族とともに、壕の中へ入る。

○回想・壕の中（夜）

壁に沿って三〇人ほどの人が座っている。

芳子と幸代も座る。

幸代は下を向いて泣いている、芳子が穴の奥を見るとカネが座っている。

芳子「（小声）幸代ちゃん、カネも来てるよ」

幸代は涙を拭いて、顔をあげる。

カネは二人に気付き、顔をゆがめたりひょうきんな顔をする。

芳子は笑い、幸代も笑顔を見せる。

男性Aの声「こんなときに、笑うような子供は出て行け、アメリカ」

に見つかったらみんな、命はないんだから」

幸代の母「(小声)すみません静かにさせます」

カネはほっぺを膨らませる。

芳子と幸代は笑顔でカネを見る。

カネはひよつとこのような顔をする。

○元の壕の入り口(朝)

幸代が穴の近くにある石に腰を下ろす。

幸代「戦争は終わったの、もう終わって七〇年」

芳子の声「よっちゃん、死んでしまうの……私もいつか死ぬんだよね、

でもすでに死んでるのもおなじかな……」

幸代「私たちは今、生きてるの！だからお願い、壕から出てきてほし

いの」

芳子の声「私はこのままここで死んだほうがいいと思うの、このまま」

幸代「私はよっちゃんに、会いたい、よっちゃんの顔見て……戦争の

苦しみを……終わらせて死にたいの、そうしないとなんで生き

延びてきたのか……」

芳子の声「幸代ちゃん……」

幸代「このままじゃ、なにも変わらない、七〇年なんのために、長い

夜を耐えてきたのかわかんないじゃない」

芳子の声「……幸代ちゃんはいついなくなっちゃうの……」

幸代「もうすぐだと思う、二月か三月か……だから」

芳子の返事はない、壕の中は静か。

幸代は肩を落とし、ゆっくり腰をあげる。

芳子の声「……ごめんね、私はここから出られない……」

幸代は顔を上げて

幸代「よっちゃん……また来るね」

幸代は壕に向かって深くお辞儀をして、ゆっくり顔を上げると木の板をゆっくり動かし、穴を閉じる。

○壕の中（朝）

穴の入り口から少しの陽が差し込んでいるが、徐々に入り口が暗くなる。

○金城家・居間（夜）

畳間に向かい合って座り、食事をしている金城と幸代。

金城「明日は病院に行く日だよな」

幸代「明日は行くの変更します、ちよつと妹にきてほしいって連絡したの」

金城「また、どうして」

金城「よっちゃんが壕から出るために、千代に手伝いをお願いしよう
と思つて、千代は戦争中まだ三歳でしたから、壕の中の記憶もないですし、よっちゃんが外に出るとき、一度中に入つてもらつて、一緒に出てきてくれたらと思つて」

金城「そうだな……、おまえも本当はあの壕には近づきたくないだろうに……七〇年も通い続けて」

幸代「出られないよっちゃんに比べたら、だいぶましです」

幸代は目を閉じる。

○回想・壕の中（夜）

T 「一九四五年六月」

暗い壕の中。

座っている幸代、仲宗根千代（3）、母。

幸代「お母さん、お腹すいたよ」

幸代の母「ごめんね、もう食べるものなくて」

手にロウソクを持った芳子とカネがやってきて、

芳子「幸代ちゃん、なにかお願いしてみて」

幸代「お願いごと？」

芳子「私は魔法使いです、あなたの願いを叶えます、えへん」

幸代は手を合わせながら、

幸代「食べるものがほしいです」

芳子はカネと顔を見合わせてにつこり笑うと、ポケットから芋を出す。

幸代「わ！すごい！」

芳子「しー」

芳子は口元に人差し指を当て、

芳子「（小声）さっき、カネと外行ってみつけてきたの、みんなで少しずつ食べよ」

幸代の母「ありがと、でも危険だから外には行ったらだめよ」

芳子「おばちゃん、平気、私、走るの得意だし、アメリカカーがやってきたらやつつけてやる」

カネ「壕から出て少し行っただころに、畑をみつけたから、これから毎日行ってくるよ」

芳子「でも、大体のものはとられているのよね、畑の奥から掘り出さ

れていない芋を探すしかないんだけど」

幸代「ごめん……わたしも一緒に行って手伝いたいけど……」

芳子「大丈夫、幸代ちゃんは走るの苦手だし怖がりだから、待っててカネ「任せて」

幸代は頷く。

○回想・壕の中（次の日）（朝）

壕の入り口から少し陽が差し込む。

幸代が周囲を見回している。

堀沿いに疲れ果てた人々が寝ている。

母と千代のところに戻り、幸代は母の肩をたたいて、

幸代「お母さん、今朝起きたら、よっちゃんとかネちゃんの姿がないの」
幸代の母「また外へ行ったのかね」

幸代「ちよつと入り口見てくる」

幸代はゆつくり入り口へ向かう。

○回想・壕入り口（朝）

ゆつくり外を見渡している幸代。

朝焼けの綺麗な空が広がっている。

幸代は空を見上げて

幸代「綺麗」

幸代は深呼吸をする。

泣き声が聞こえてくる。

幸代が声のほうを向き、ゆっくり歩く。

○回想・雑木林（朝）

芳子の後ろ姿。

幸代は芳子の元へ駆け出す。

幸代「よっちゃん、どうしたの？」

芳子の目の前に、横たわるカネ。

着物は破けていて、太ももから血が流れている。

芳子「カネ……息してない」

幸代「え！カネちゃん、カネちゃん」

幸代は必死にカネを呼ぶ。

カネは動かない。

○回想・壕の中

幸代と芳子は声を押し殺して泣いている。

少し離れたところにいる女性二人が話している。

女性A「暴行されたんだって」

女性B「かわいそうに、まだ小さいのに」

女性A「米兵か日本兵かわかんないけど、女とわかると子供まで狙われるなんて……」

芳子は震えている。

幸代は芳子の手を握る。

○元の金城家・居間（夜）

机は隅に置かれ、布団が敷かれている。

金城と幸代が仰向けに寝ている。

幸代「あのとき、よっちゃんは二度と外に出ないって誓ったんだと思うの」

金城「もう、思い出すな、寝るぞ」

幸代「ごめんね、私もあなたに迷惑かけて」

金城「なにが？」

幸代「妻として、あなたに何もしてあげられてない」

金城「また、その話か」

幸代「最近、思うの、死ぬ間近になって、あなたとの子供を作ることもしなかった自分って、あなたと結婚するべきじゃなかったん

じゃないかって、私はなんのために生きてきたのかなって」

金城「なんだよ、そんなくだらない話して」

幸代「はずれくじ引かせちゃったね」

金城「馬鹿な話しばかりして……あのとき、お前と出会えたから、生きてこれたんだ、俺が生きるために神様が出会わせてくれた、

日々感謝だ、ほら、早く寝ろ」

金城は布団を肩までかぶり、幸代に背を向け横を向く。

幸代は金城をそっと見て、

幸代「おやすみなさい」

金城「ああ」

部屋の窓からは月が見える。三日月。

○回想・壕の中

やつれた顔の幸代、周りの人々もぐったりしている。

男性Bが入り口から入ってきて、

男性B 「手榴弾を手に入れた、今日奥の壕で自決を決行する、自決希

望者は奥の壕へ移動するように」

幸代のそばに座っている幸代の母、祖父、祖母は話している。

心配そうな表情で見つめる幸代。

○回想・壕の中（夜）

数名の人たちがゆっくり壕の奥へと向かって歩いていく。

祖父と祖母、幸代の母は顔を見合わせて、小さく頷く。

幸代の母「（小声）幸代、行こう」

幸代はゆっくり立ち上がる。

幸代に手をひかれ、立ち上がる千代。

母は幸代と千代を抱きしめながら、

幸代の母「(小声) 幸代と千代のおかあちゃんになれて幸せだったよ、

ありがとうね」

幸代は緊張した表情。

○回想・壕の入り口・外(夜)

月明かりで少し明るい地面、月に雲がかかる。

爆発音が鳴る。

○回想・壕の中(夜)

着物のはぎれが散乱している。

千代の声「お姉ちゃん、重いよ」

幸代が目を開け顔を上げようとする。

祖父、祖母、母に守られるように、下敷きになって倒れている幸代と千代。

幸代の右肩に母の顔。

幸代「お母ちゃん！」

○回想・壕の入り口（夜）

幸代は千代を抱いて、走って出てくる。

唇を強く結んで一生懸命走って行く。

○元の金城家・外観

のどかな民家が立ち並ぶ中に、平屋と畑が見える。

赤い車が家の前に止まっている。

○金城家・居間

吉本千代（73）が仏壇に手を合わせている。

幸代がテーブルにお茶を置いている。

千代がテーブルに着き、紙袋を差し出す。

千代「これお土産、東京の有名なお店のどらやき」

幸代「東京へ行ったの？いつもありがとう」

殺風景な居間。

千代の声「ネットで注文」

千代はお茶を飲みながら、

千代「いろんなもの、食べたり、見たり、すぐなんでも手が届く時代

なんだから」

幸代「命は手に入らないじゃない」

千代はぶつきらぼうに、

千代「また、そんな屁理屈言って」

幸代は千代を見て、

幸代「どうかしたの？なんか暗い顔してるけど、なにかあった？」

千代「今年きつと私、厄年だわ、姉さんの病気伝えられて、心配で不

安な毎日なのに、先週は美奈が……」

幸代「美奈ちゃんどうしたの？」

千代は少し下を向いて、

千代「赤ちゃんができたんだって」

幸代「え？赤ちゃん、妊娠したってこと」

千代は小さく頷く。

幸代「結婚ってこと、おめでたいじゃない」

千代は首を横にふり、

千代「お腹の赤ちゃんはひとりで育てるらしいの」

千代の目から涙がこぼれる。

千代「相手には奥さんがいて、だからひとりで産んで育てるって、しかも、胎児ドックを診けたら、もしかしたら障がいがあるかもしれないんだって」

幸代は、驚いた表情。

千代「美奈を産んで一年であの子の父親が海で亡くなってから私がどんだけのおもいで育ててきたか姉さん知ってるでしょ、精一杯育ててきたの、なのに結婚もせずに妊娠、しかも不倫だから結婚

できないなんて」

幸代「美奈ちゃんは大丈夫なの？」

千代「絶対生むんだって」

千代「私がどれだけあの子の幸せのためにって生きてきたことか」

千代は涙をぬぐって、

千代「ごめん、ごめん、姉さんから話しがあるって来たのに、お姉ちゃんが、頼みごとなんて初めてだから、どうしたの？」

幸代は小さく頷く。

幸代「美奈ちゃんがこんな時に申し訳ないんだけど、いつ死ぬかわからない私だし、死ぬ前にあの当時のこと、きちんと話しておきたくて」

○壕の前（夜）

幸代と千代が歩いてくる。

千代の声 「土地の所有権買って、ずっと守ってきただなんて」

千代は抱えていた花束を備える。

千代 「ここが母さんたちが自決した壕なのね」

千代はそっと手を合わせる。

千代 「芳子さん、ずっとここに……」

幸代はゆっくり木の板を動かす、千代も手伝う。

幸代 「よっちゃん、来たよ」

壕の中からは歩く音が聞こえる。

幸代 「よっちゃん、今日は妹の千代も来てるの、元気に暮らしているし、

私が死んでも、千代が助けになるから、ね、もう出てきて」

壕の入り口を見つめる千代と幸代。

千代は壕に耳を傾け、首を左右に振る。

幸代は壕の入り口に近づいて、

幸代「いつか、よっちゃんに会えるって思ってた生きてきたの、辛い記憶ばかりの人生でよっちゃんに会える日を希望にして生きてきたの、お願い顔を見せてほしいの」

穴の奥は物音ひとつしない。

幸代と千代は顔を見合わせ、幸代は肩を落とす。

○金城家・居間（夜）

千代と金城、幸代がテーブルを囲んでいる。

千代「嘘をつくしかないんじゃない」

幸代「うそ？」

千代「姉さんが行方不明になって一緒に探してほしいと私が頼むとか」

幸代「嘘はだめよ」

千代「う……ん、七〇年も出てこない人、そんな簡単に出てくる決意

なんてできないんじゃないかしら、姉さんが死ぬ、かもしれないな

いっていうことでも、無理だなんてもう何がおこっても無理じゃ

ない……かな」

幸代はゆっくり呼吸をして、遠くをみつめている。

○幸代の夢・砂浜

幸代（8）、芳子（8）、カネ（8）が川の字になって寝転んでいる。

空には青い空が広がっている。

芳子「この景色大好き、広い青い空が広がっていやなことがあって

もすぐ忘れられる」

目を閉じて笑顔の幸代、

幸代「そうだね、三人の秘密の場所だよね」

カネが起き上がり、

カネ「秘密の場所ってなんかいいね」

芳子と幸代も起き上がりながら、

芳子「いっつもここで話してるもんね、私達」

幸代「もし、なんかつらいことがあったら必ずここで集合ね」

頷く二人。

○幸代の夢・砂浜

波の音が響き渡り、穏やかな波が押し寄せては引き返す。

○金城家・居間（深夜）

布団に横になった幸代がゆっくり目を開ける。

幸代「あの場所……」

○同・居間（朝）

新聞を広げている金城。

紙面には『××海岸、埋め立て賛否問う』の文字。

金城「××海岸、埋め立てられるんだろうな」

部屋に入ってきた幸代は、

幸代「あの景色が見ることできなくなっちゃうんですね……」

新聞に目を落とす。

○壕の外

幸代がやってくる。

× × ×

幸代が穴に話しかけている。

幸代「よっちゃん、あの砂浜覚えてる？」

芳子の声「……秘密の場所？」

幸代「そう、あそこ、埋め立て工事が始まるみたいで、もう一度、あ
そこの砂浜に寝転んで」

○回想・砂浜

穏やかな波、海の奥には地平線。

幸代の声「あそこで二人で空を見上げたい」

青い空。

○壕の中

真つ暗な中、芳子の後ろ姿。

芳子は頭をそらし、上を見上げる様子。

○壕の外

幸代が空を見上げている。

芳子の声「私はゆっくり終わりを待つだけ、カネやここで死んでいっ

た人たちとの時間を待つだけ」

○金城家・居間

妊婦の吉本美奈（28）の少し膨らんだお腹、

美奈の声「幸代おばちゃん、お願い」

美奈が真剣な顔をして話している、向かいに座っている幸代。

美奈「お母さんを説得してほしいの」

美奈がお腹に手をあてながら、

美奈「父親がいなくても、もしかしたら障がいがある子どもでも、私

は育てたい」

幸代は困った表情で、

幸代「ごめんね、おばちゃんもあなたの未来のためにはおろしたほうが良いんじゃないかって思うのよ」

美奈「こどもはお母さんを選んで生まれてくるんだって、私のことを

選んで来てくれるこの子に会いたいので、一緒に生きていきたいの」

金城が部屋に入ってきて、

金城「人が生きている意味ってそういうことだよな、誰かと出会って、その時代を生きること、おまえがよつちゃんに会いたいという思いもそうだろう」

金城が美奈を見て、

金城「美奈のことは、俺は自分の子供のように思ってる、美奈が決められたことなら、おじちゃんも全力で応援したい、なにか不安なことがあるならみんなまで支えていけばどうにかなるんじゃないか」

幸代は心配そうに金城を見て、

幸代「そんな、勝手に」

美奈「おばちゃん、応援してほしいの、私はこの子がお腹にきてくれ

てとっても幸せに感じたの、この子に会うのが楽しみなの」

幸代は美奈の手を握って微笑む。

吉本千代（73）が入ってくる、

幸代「千代、いつ来たの？」

千代は頬の涙をぬぐいながら、席につき、

千代「覚悟を決めてるのね、ならお母さんも何も言わない、あなたの

人生だもん、親は応援するのみよね」

幸代が金城と顔をみあわせ微笑む。

千代「姉さんの病気のこと、そして戦争のことや私がいま生きている

こと、いろいろ考えたら、頭で考えることではないのかなって

おもってきて、前を見て強く生きれば、道は開けると思うのよ」

千代が美奈の側に座り肩を抱く。

笑顔の美奈と千代。

○壕の前（夜）

幸代と千代、ゆっくり美奈が歩いてくる。

千代の声「美奈、足元に気をつけてね」

美奈「うん、大丈夫」

幸代はゆっくり木の板を動かす、千代も手伝う。

幸代「よっちゃん、来たよ」

壕の中からは歩く音が聞こえる。

芳子の声「幸代ちゃん、何度もごめんね、でも、私の気持ちは変わらない」

幸代「よっちゃん、今日は千代の娘の美奈も来てくれたのよ、それとね、

美奈のお腹の中には赤ちゃんがいるの、母になるって、もうひとつの人生に責任を持つってとっても大変なことだろうなって、子供のいない私には想像以上のことだと思っただけ、最近、自分の母のことをよく思い出すのよ、どんなおもいで私を産んで、育てて、どんな思いで死んでいったのか、でも、きつと私に幸せになってほしいって常に願っていたに違いないだろうなって」

○壕の中（夜）

真っ暗な中に、入口から一筋の光。

芳子の後ろ姿。

○壕の外（夜）

千代「芳子さん、一緒にいろいろなものを見たり、そして感じたりしませんか、実は、私、娘に子どもをおろすようにって言ったんです、そのときはそれが娘にとって幸せなことだと勝手におもって、でも、いまは後悔しています、一度でもそんなことをおもった自分を恥じています、生きたくても生きられない命もあるんです、せつかくの命、どう生きるか、その人次第なんですよ」

美奈「親はこどもの幸せを一番におもっています、苦しい戦争を乗り越えた命だからこそ、いま幸せに生きてるようになって願ってると思うんです、芳子さんのお母さんやご家族も」

○壕の中（夜）

浴衣姿の芳子の後ろ姿、長く伸びきった髪を引きずり、ゆっくり歩く。

○空（夜）

大きな満月が出ている。

○壕の入り口（夜）

千代と幸代、美奈の前に立つ大城芳子（78）。

月明かりに照らされる幸代と芳子のシルエット。

○金城家（夜）

外灯も消えて、真っ暗。

○同・居間（夜）

机の真ん中に置かれたろうそく。

机を囲む幸代と金城と芳子。

幸代「お互いしわしわになってるかと思ってたけど、よっちゃんは肌は綺麗だし、若く見える、私は太陽浴びすぎたのかな、がさがさよ」

金城「すまん、畑仕事させすぎたかな」

幸代は金城を見てにっこりと微笑む。

芳子は真剣な表情のまま。

幸代「よっちゃんが生活に慣れるまで、体が慣れるまで、ゆっくりで

良いからね」

芳子ゆっくり頷く。

○同・客間（夜）

仰向けに寝ている芳子、じっと天井を見つめている。

○同・居間（夜）

横になっている金城と幸代。

幸代 「よっちゃんのこと、宜しくお願いしますね」

金城 「七〇年ぶりか……彼女は何を考えてるのかな」

幸代 「私たちは戦争が終わって、無我夢中で生きてきましたからね」

金城 「どうやって生きていけば良いか、考えると難しいな」

幸代 「こたえがなんなのか、この年まで生きてきてもわからないもの」

金城 「考えるもんじゃないんだろうな、与えられた時間を生きる、そ

れで一日一日が繋がっていくってだけのこと」

幸代「浩一郎さん、久しぶりに手を握ってもらっていいですか」

金城「子供みたいなこと」

金城は右手を幸代のそばに出す。

幸代は左手を出し、金城の右手が包みこむ。

○金城家・外（朝）

幸代は畑に水をあげている。

芳子が玄関から出てくる。

幸代はあわてて、ホースを置き、芳子に駆け寄る。

幸代「よっちゃん大丈夫？」

芳子「うん」

幸代「体きつかったりしない」

芳子「大丈夫、空気がいい匂いがする」

幸代は大きく深呼吸する。

幸代「壕の臭い、もう忘れちゃった」

芳子「土の臭い、水の臭い、食べ物臭いや人が死んでいく臭いやら、いつからか、臭いを感じないようになってた」

芳子は大きく深呼吸する。

芳子「幸代ちゃん、いろいろ私に教えてもらえるかな、七〇年分」
幸代は頷く。

○平和記念公園内

千代が日傘をさして歩いている。幸代はその後ろを芳子の手を引いて歩いている。

○同・ひとつの礎前

『大城芳郎』、『大城ヒデ』、『大城靖男』

『大城ヒデの子』の文字。

芳子は屈んで字をなぞりながら、

芳子「父ちゃんと母ちゃんと兄ちゃん、それでこれ、私のことよね」

芳子の隣に屈む幸代は首を横にふり、

幸代「よっちゃんは生きている」

二人の背後に立つ千代。

千代「戸籍とかどうなるんだろ」

幸代「私が死んだ後、よっちゃんは私の戸籍を使えばいいよ、騒ぎ立

てられたくないもの」

千代は不安そうな顔で幸代をみつめる。

芳子と幸代はゆっくり手を合わせる。

○国道58号線

赤い車が走っている。

○嘉手納基地

大きな滑走路が見える。

戦闘機が離陸していく。

○とある道

モノレールが走っている、道路は車が次々と走っていく、
周囲には商業施設が立ち並ぶ。

○××海岸・砂浜（夕）

地平線に夕日が沈みかけている。

砂浜に腰を下ろしている幸代と芳子。

幸代「いろいろ見て回って疲れたんじゃない」

幸代「この景色はあの頃と変わらないね」

芳子は自分の手を見て、

芳子「だいぶおばあちゃんになったね」

芳子と幸代の後ろ姿（背中が丸まっている）。

幸代は仰向けに寝転ぶ。

芳子もゆっくり寝転ぶ。

幸代は芳子の手を握り、

幸代「よっちゃんこの景色……見ることができるなんて……」

幸代の目からは涙がこぼれる。

目を閉じている芳子の顔。

芳子の目から一筋の涙が頬をつたう。

○金城家・畑

畑作業をしている金城、幸代、芳子。

○同・居間（夜）

夕食を囲む三人、手をあわせて、

三人「いただきます」

金城と幸代は箸を持ち、食べ始める。

芳子はひとつひとつのお皿を手に取り、祈り（感謝）をささげる。

金城と幸代は芳子を見つめている。

金城「芳子さんと生活すると、普通の生活も感謝の日々だと気付かされるな」

幸代「そうだね」

幸代は箸を置き、手を合わせる。

○同・居間（夜）

テレビがついていて、ニュース番組が放送されている。

アナウンサーの男性「シリアへの空爆が激化しています」

驚き、部屋の隅に蹲る芳子。

部屋に入ってきた幸代は芳子とテレビを交互に見て、芳子に駆け寄り、

幸代「よっちゃん大丈夫だから、これはとても遠い国で起こっていること」

芳子「(大声) まだ、戦争は終わってないじゃない、壕に戻らなきゃ」
芳子は震えている。

幸代は芳子を抱きしめるが、激しく咳こむ。畳には吐血。

○南部病院・外観(夜)

『南部病院』の看板。

救急車が玄関に止まっている。

○同・病室(夜)

ベッドに寝ている幸代、

ベッドのそばの椅子に腰掛けている芳子。

幸代は目を開ける。

芳子「幸代ちゃん大丈夫？」

幸代「ごめんね、びっくりさせて」

芳子「今、先生と旦那さんが話してるけど」

幸代「嘘ついてたのバレたかな」

幸代はゆっくり起き上がり、

幸代「あの人タバコ吸ってたから、気にさせたくなくて、実は肺がん
なんだけど、心臓病ってことにしてたの」

幸代は目を閉じて、

幸代「小さい頃の壕の臭い、ずっと忘れられなくて、でもあの人
そばにいとタバコの臭いがすべてを忘れさせてくれたの、あ
人の香り、その香りで生きてこれたから」

○回想・とある道

千代を背負って歩いている幸代。

道で蹲っている金城浩一郎（9）。

幸代は金城を見て、駆け寄る。

幸代「どうしましたか？」

金城「脚の裏が切れて、歩くと傷口が開いて痛くて、歩けなくて」

幸代は千代をおろして、洋服のすそを切り、包帯のようなものにする。

顔を強張らせていた金城は、徐々に息も整ってくる。

○回想・小屋

トタン屋根の倉庫。

幸代と金城、千代はひとつの芋を少しずつ手で割って食べる。

幸代 N 「それからは、一緒に、食べるものを探したり、私、臆病だし怖がりだから、一緒にいてくれてとても支えられたの」

○回想・市場

人通りが多く、露店が並ぶ。

大きなかごを傍に置いて、仲宗根幸代（16）は座っている。前には野菜が並ぶ。

○回想・金城家畑

金城浩一郎（17）が畑の傍に座り、タバコをふかしている。

幸代の声 「生きるために食べ物を作って、売りに行つて、一緒に食べて、

次の日がやってきて、そんな日々を重ねてきたら七〇年に」

○元の病室（夜）

ベッドに横たわっている幸代、ベッド傍の椅子に腰掛けた芳子。

幸代「もうすぐ……あの人と離れるのが……寂しいな」

幸代は無理に笑顔を作ろうとする。

芳子「覚えてる？昔カネと三人で話した将来の夢」

幸代「うん、カネはお嫁さんって言った」

芳子「カネ、なれなかったね、私も先生どころか字も書けないし……」

幸代「私だって夢のまた夢だった、女優なんて」

幸代は自分の顔を触って笑う。

芳子「ずっと私のところにも通ってくれていたし、幸代ちゃんの時間を

私も奪ってしまったね、ごめんなさい」

幸代「そうしかできなかったの、私は」

芳子「私、なんで生きてきたんだろ、これから生きていく意味あるのかな」

幸代は芳子の手を握り、

幸代「そんなこと言わないで、よっちゃんに会えて、私の願いは叶ったんだよ、よっちゃんの勇気が叶えてくれたんだから、生きていてくれて良かった、本当に、残りの人生、一緒に昔話できるなんて、有難い」

幸代は目を潤ませている。

幸代「でも、私入院しちゃったら、よっちゃんにいろいろ教えてあげられないね」

芳子「私毎日来るから、幸代ちゃんの七〇年の人生、もっと教えて欲しい」

幸代、ゆっくり頷く。

○病院玄関前（朝）

芳子が病院に入っていく、手には風呂敷包み。

○病室（朝）

ベッドの簡易テーブルの上には折箱。

形が崩れた卵焼き。

幸代「初めてにしては上出来よ」

幸代はひとつ手でつまみ口に入れる。

満足そうな笑みで、芳子の耳元で、

幸代「（小声）病院のよりずっと美味しい」

芳子も笑顔。

幸代「明日は、おむすびをお願いしてもいいかな？あんだんすー（油

味噌）入りで」

芳子はノートを幸代に渡しながら、

芳子「つくり方をお願いします」

幸代はペンを持ち、豚の絵を書き始め、

バラ肉、みその絵、左手では分量を表して、

幸代「このぐらいの量で油で炒めるの」

芳子は真剣な表情で頷いている。

× × ×

ベッドに腰掛けている、幸代と芳子。

幸代の手には写真が一枚、着物姿の幸代と正装している金城の
写真。

幸代「これは私たち夫婦の唯一の写真なの」

身を乗り出して見ている芳子。

幸代「カネちゃんのことがあったから、男の人が怖くて、それで、夫
婦の営みもできず子供をもつことできなかつたの、夫婦だけだ
と写真を撮る機会なんてなくって」

○回想・とある写真館

着物姿の幸代（30）、スーツ姿の金城（31）、金城は緊張した表情、
幸代は落ち着かない様子。

幸代の声「千代が嫁ぐ前に家族写真を撮りたいって言い出して、それで十月十日の祝日に写真を撮ることにしたんだけど、その日は那覇祭りの日で、市内の道がものすごく混んでいて、結局千代は間に合わず」

○元の病室（朝）

芳子「二人の記念の写真になったんだね」

幸代は懐かしそうな表情。

○同・病室

幸代はベッドに横になっている。

芳子は近くの椅子に腰掛けている。

幸代「今年の慰霊の日の前に新聞社の人が家に来て、七五歳以上の人の戦争体験を調査してるって、覚えている記憶を語ってくれませんかかって言ってきたんだけど、話す気にはなれなかった、今年七〇年目の慰霊の日を迎えて後世に伝えなければと少しずつ語りはじめた人たちが少なくないみたい」

幸代は部屋の窓をみつめる、芳子は目を閉じて聞いている。

幸代「七〇年間を話すのにどれだけの時間がかかるかと思ったけど、私の人生大した事ないね（苦笑）半日もかからずに、おしまい」
芳子はゆっくり目を開けて、

芳子「幸代ちゃんの声、綺麗だね、聞いていると、そのときの様子が目に浮かんできて、引き込まれちゃった」

幸代は笑顔、芳子は微笑みながら、

芳子「幸代ちゃんの人生羨ましい、カネの夢、お嫁さんになれてるし、新しい家族と一緒に過ごせて羨ましい、素晴らしい人生だね」

幸代「ごめんなさい、よっちゃんに辛い思いさせた？」

芳子は首を左右に振り、

芳子「勇気持つて壕から出た幸代ちゃんだからこそ出会えた人生だよ、それに、私は私で壕の暮らしは慣れてきて楽しみもみつけれ、てたんだから」

幸代「……たのしみ？聞いてもいいかな？そのよっちゃんの楽しみ」

芳子はポケットから簪を出す、琉球漆器の螺鈿が施された綺麗な一品。

幸代「きれいな簪、これよっちゃんが作ったの？」

芳子は頷く。

○回想・昔の那覇の町

細い小道、補整されていない道、何件かの古民家が立ち並ぶ、木の看板が家の前に出ている『漆器』の文字。

○回想・大城琉球漆器店内

二畳ほどの部屋、漆のお盆が乾かされている。

隣の部屋では芳子の父と靖男が加飾の作業をしている。

窓越しに見ている芳子（8）と幸代（8）。

幸代「よっちゃんのお父さんと兄さん、カッコいいね」

芳子も笑顔で頷く。

○元の病室

芳子の手のひらの簪。

幸代「兄さん、なによりも漆器作りが好きな人だったから、道具や材料を壕の奥に運んで作業してたの」

○回想・壕の中

芳子の父と靖雄が漆器を拭いている。

芳子が二人に近づき、

芳子「これどうするの？」

芳子の父「まだ、未完成だからちゃんと完成させなきゃな」

靖男「壕での生活は大変だけど、漆器にとって良いことがわかったん

だよ」

芳子の声「漆は湿気を好むから壕の中は最適だって兄さん話してくれ
た」

○回想・壕の中

芳子（20）が漆器に加飾作業をしている。

芳子の声「みんながいなくなって、漆器だけが私の周りに残って、それで次第に没頭していったの、綺麗な朱色や貝の装飾は暗い壕に
いることを忘れさせてくれさえもした」

○元の病室

幸代は芳子を見て、

幸代「よっちゃん作品見てみたい、壕の中にはたくさんあるの？」

芳子「たくさんではないけど、父と兄が運んだ大箱二個分ぐらいかな」

○壕の入口

赤い車が停まっている。

千代が大きな箱を持って出てくる、そばには芳子。

○金城家居間（夜）

畳の上に琉球漆器のお盆や、皿、重箱

小さなアクセサリが三〇点以上並んでいる。

千代の声「芳子さんすごい、立派な作品ばかり」

千代とお腹が目立つようになった美奈は漆器を手に取り見入っている。

芳子は千代の隣に座っている。

金城に支えられ部屋に入ってくる幸代、

目を輝かせて作品をみつめる。

幸代「すごい！」

千代と美奈は幸代を見て、

千代「姉さん、病院は？」

金城「数値がおちついているから一時的に退院の許可がおりたんだ」

幸代と金城も二人のそばに座る。

金城「芳子さんの作品が早くみたくてみたくて、待ちきれない様子で、

子供みたいだったよ」

美奈「病は気からって言うから、このまま完治しちゃったらいいね」

幸代「ほんと、よっちゃん和生活するようになって、毎日が愛おしい

のよ」

幸代は琉球漆器を手に取り、満足そうな表情。

○同・台所（夜）

金城がフライパンで野菜を炒めている。

隣に立って、まな板できゅうりを切っている芳子。

芳子「このくらいの大きさで大丈夫ですか？」

金城は芳子の手元を見て、左手親指と人差し指でマルを表す。

芳子は笑顔。

金城「じゃ、次はお肉を切ってもらえますか」

芳子は頷き、まな板に豚肉を置く。

○同・廊下（夜）

幸代が笑顔で二人の様子をみつめている。

芳子の声「痛！」

○同・台所（夜）

芳子の左手人差し指から血が出ている。

金城は芳子の手を自分の唇で、止血している。

○同・廊下（夜）

芳子の手を取り、水で洗い流す金城の後ろ姿を見つめる幸代は少し寂しそうな表情。

○同・居間（深夜）

金城と幸代がそれぞれの布団に寝ている。

幸代は天井を見つめているが、いきなり起き上がり、

幸代「あなた」

金城はびっくりして起き上がり、

金城「体、具合悪いのか？」

幸代「私が死んだら、よっちゃんをお嫁さんにする？」

金城「どうした？いきなり？」

金城は布団の上にあぐらをかいて座る。

幸代は金城の向かいにひざまずき、まっすぐ金城を見る。

金城は右手で頭をかきながら、

金城「そんなことはあるはずないだろ」

幸代「私たちだって、一緒にいるしかない状況だったから夫婦に納まった、恋とか愛とかではなかったじゃない」

○回想・とある道

金城（9）が蹲り痛がっている。

幸代（8）は金城の脚に布を巻き、止血をしている、幸代の横顔をじつとみつめる金城。

金城の声「俺は最初から、恋してた」

○元の金城家・居間（深夜）

金城は視線を幸代に向けて、

金城「お前しか俺の嫁さんにはしたくなかった、そしてこれからもずっ

とお前だけだ」

幸代は目を潤ませながら、

幸代「あなた」

金城「ん？」

幸代「……私を抱いてくれませんか、キス、してくれませんか」

金城はつばを飲み込み、深呼吸をする。

金城は幸代の肩を両手でそっと抱き、ゆっくり、強く抱きしめる。

幸代は金城の胸に顔をあずけ、

幸代「あなたの妻になれて良かった……」

○同・庭（深夜）

塀沿いに月下美人の花が満開に咲いている。

○同・庭（朝）

縁側に座っている幸代、脚をゆっくり前後に動かして、月下美人の花（しぼんでいる）を眺めている。

芳子が近づいてきて、

芳子「幸代ちゃん、なんか今日はご機嫌ね」

幸代は芳子を見て、にっこり笑い、

幸代「月下美人の花、昨日咲いたみたい」

芳子「だから良い香りがしてたんだ、一夜、綺麗な花と高貴な香りを残すって小さい頃母にこの花のことを聞いたときには、こんな女性になりたいって憧れたのよ」

幸代「一夜だけしか咲かないから、ちゃんと見てほしいって願いながら咲いてるのかも」

芳子も縁側に腰掛け、花を見つめる。

二人の後ろ姿。

幸代「よっちゃんの琉球漆器の作品、人に見てもらえる展示会とかしたらどうか、よっちゃんが漆器の作り方を教える、先生になるのもいいんじゃないかしら」

幸代は笑顔で芳子の顔をのぞく。

○南部病院・多目的ルーム

入り口には『琉球漆器講座』の文字。

部屋の中には三つテーブルがあり、数人が腰掛けている。

真ん中には芳子がお箸を持ち、拭き漆の説明をしている。

入り口に立っている看護師Aと幸代。

看護師 A 「入院患者の方たちにこういう企画開催できるの、とっても

有難いです」

幸代 「良かった、よっちゃんも楽しそうだし」

芳子は笑顔で説明している。

○同・幸代の病室（夕）

幸代と芳子が入ってくる。

幸代 「大盛況だったね」

芳子 「幸代ちゃんのおかげです、実は幸代ちゃんや金城さんにお料理

教わってるより、私には向いているみたい」

幸代 「七〇年のキャリアがあるんだもん、立派よ、先生の夢、叶ったね」

芳子はにっこり笑う。

幸代はベッドに横になる。

芳子は椅子に腰掛けながら、

芳子「幸代ちゃんもやってみない？」

幸代「？漆器づくり？」

芳子「違う違う、もひとつ夢、叶えませんか」

幸代は首をかしげて芳子を見る。

○同・病室（夜）

ベッドの上に跪き、発声練習をしている幸代。

幸代「あ、い、う、え、お、か、き、く、け、こ」

○同・多目的ルーム前廊下

幸代の声「男性の手には手榴弾が」

入り口には『朗読会・壕の中』のポスター。

照明は暗く、四〇人ほどの人が椅子に座って話しを聞いている。簡易舞台の真ん中で座って話している

幸代、その後ろには芳子の琉球漆器の作品が飾られ、暗い中で貝の装飾部分が輝いている。

幸代「総勢七〇人が一つの壕で約八ヶ月過ごしました、生き残ったのは私と妹、そして友人の三人だけです」

幸代は目を閉じる。

○回想・壕の中（夜）

男性Bの手には手榴弾。

幸代の母の声「幸代と千代のお母さんになれて幸せだったよ」

幸代の母、祖父、祖母が目を閉じて座っている。

○元の病院・多目的ルーム

簡易舞台の真ん中に座っている幸代。

幸代「なんで、私は生き残ったのか、生きるっていうことはなんなのか問い続けてきました」

後ろの席に座っている金城。

幸代は金城を見て、

幸代「生きていたから、愛する人に出会え」

舞台の横側に座っている芳子。

幸代「思い出を友達と振り返ることもできました、人はなんで生まれ

○金城家・外

てくるのか、大きな仕事をして有名になるひとはそれが使命、天命とかいうものだと思いますが、普通の人は、母親を選んでそのひとの子供として生きることが目的なのかなと、死を目前に思うんです」

幸代は芳子を見て微笑む。

幸代「人生は良きものです、短くても、長くても良きものです、やっ
と笑顔で、死んだ母に会えます、生んでくれてありがとうございます
やっとな笑顔で伝えられます」

幸代は遠くをみつめ、満足そうな表情。

観客は拍手している。

赤い車が止まる。

中から吉本光（〇）を抱いた美奈、運転席から千代が降りる。
光の笑顔。

○金城家・居間

仏壇に飾られている、金城と幸代の写真。

その傍に、朗読会の写真が数枚（幸代は笑顔）、
その隣に幸代の遺影。

○金城家・庭

居間にいる光と千代、美奈、金城。

青い空が広がる。

(完)